特集 三丘文化クラブの系譜

文化クラブの変遷

＝文中敬称略＝

図について
- ここに記したのは 1950 年の「学校要覧」以降のクラブであり、51 年以降は学校要覧に加え卒業アルバムなどで確認できるものを記した。「同好会」は掲載していない。
- 1～2年の抜けがあるものは実線とし、長期にわたって休部が続いていたものは破線で示した。
- 同じクラブでも異なる名称で記されていることがある。カメラ部・写真部・光画部は同じ部とみなしている。天文部・天文気象部も同上。美術部は 59 年～83 年は「美術工芸部」となっている。
- 「クラブ」と「部」は厳密に使い分けられておらず、同義と考えられる。この特集でも「部」を主に、「クラブ」も使用した。

2010 年　2000 年　1990 年　1980 年　1970 年　1960 年　1950 年

稲本氏

吹奏楽部

1960年創部。80年度以降は部員数で文化クラブトップを誇る。84年の野球部選抜出場時には森瑛二郎教諭の指揮のもと、応援演奏した。OB・OGと現役部員が協力して開催する「オールミニガオカブラスコンサート」は2015年、20年ぶりに実現した。
■**主な出身者**＝クラリネット奏者・稲本耕一（高15回）

新聞部

1946年11月、戦後ほぼ初の新聞部として発足した堺中新聞部（「丘学報」を発行）をルーツとする。「丘学報」はその後「堺中新聞」になり、48年に「堺高新聞」、50年10月20日から「三国丘高校新聞」となる。部員は広告取りから取材、校正までこなした。
■**主な出身者**＝AERA創刊編集長・富岡隆夫（高7回）

書道部

篆刻家でもある真鍋昌生教諭（90年着任）の指導で、篆刻も楽しんだ。当時、部員の堤田恵介（高46回）が乾式コピーに取って石に転写する【マジック転写法】を同教諭に進言、これを応用して書道科の指導書に掲載されている。部誌「TREND」は部員たちが寄付を募って発行した。

旧校舎の屋上からつり下げた垂れ幕。当時の書道部部長、大澤義弘（高 46 回）筆。

史学部

毎年テーマを決めて共同研究、成果を雑誌「河泉」に発表。1968年の「堺の切支丹灯籠」、1976年の「熊野街道」などは高く評価された。

籔内氏

中辻氏

美術部

■**主な出身者**＝絵本作家・中辻悦子（高7回）、せんとくん＝**下**＝で知られる彫刻家・籔内佐斗司（高24回）。OB会「美留丘（みるく）」が活動中。

久保田氏

音楽部

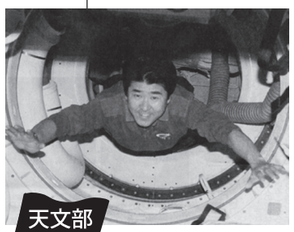
■**主な出身者**＝黒田安紀子（高12回）、高須礼子（高14回）、久保田美江（高16回）、山本和子（高27回）＝いずれも声楽家。また、OB、OGを中心とする合唱団「あんさんぶるともだち」「合唱団かえで」が活動中。

放送部

新制高校発足とともに活動し、大阪府の高校で最も古く創立された歴史をもつ。主な活動は昼食時に流す番組の制作。文化祭や体育祭、音楽関係のクラブのコンサートでも活躍。

生物部

研究成果を年1～2回、雑誌「ルーペ」に発表。5年間にわたる調査の結果をまとめた労作「堺市のプランクトン」（ルーペ39号＝72年）は大阪府生物教育研究会でも発表、高く評価された。



天文部

月や太陽、惑星を撮影して文化祭で発表。部室は3階から屋上に上がる階段の踊り場の横、「5.5階」にあった。
■**主な出身者**＝宇宙飛行士・土井隆雄（高25回＝**写真**）、「はやぶさ」回収班の西田信一郎（高26回）・山本真行（高41回）

文芸部

堺中時代からの伝統を受け継ぐクラブ。創作誌「白塔」を発行した。
■**主な出身者**＝太宰治賞を受賞した作家・小川内初枝（高37回）

雑誌部

「三丘評論」に代わって63年「学園」創刊。年に3回程度。82年まで続く。その後は、創作が中心となり、事実上、文芸部を継ぐものとなっている。

小川内氏

茶道部

最初はプレハブの別棟（美術部の2階）、その後83年に完成した作法室で活動。
■**主な出身者**＝アナウンサーの森富美（高44回）

森氏

漫画・アニメ部

年2回、部誌（イラスト集）を発行。文化祭ではポストカードなど制作。部室は旧三丘会館2階。

弦楽合奏団

95年、百周年記念事業に向けて結成され、97年、同好会から部に昇格。120周年記念式典（15年）では関西フィルと共演した＝**写真上**。

コンピュータ部

コンピュータ室で活動。文化祭でゲームや自作パソコンなど制作したものを出展。シンボルは部員が作ったオリジナルキャラクター、「サンキューマウス」＝**下**。

クラシックギター部

■**主な出身者**＝リュート奏者・今村泰典（高24回）

今村氏

理化部の部誌「イオン」

無線部

JA3YDL アマチュア無線クラブ。屋上にアンテナがあった。無線からエレクトロニクス関係やコンピュータまでを守備範囲にしていた。
■**主な出身者**＝国際宇宙ステーション日本実験棟「きぼう」のフライトディレクタを務めた土田哲（高 34 回）

（史学部は 2000 年に休部）
（写真部は 2000 年に休部）
（新聞部は 2000 年に休部）
2009 年、社会科研究部として復活
1983 年
1970 年
1959 年
文芸部は 1993 年廃部
レコード鑑賞会を開くのが主な活動
（この頃は「商業科」があった）

↑1950年学校要覧に記載のあるクラブ↓
- 生物部（生物同好会）
- 美術（美術工芸）部
- 天文（天文気象）部
- 音楽部
- 放送部
- 演劇部
- 史学部
- 写真（カメラ、光画）部
- 新聞部
- 社会科（社会科研究）部
- 華道部
- バレエダンス部
- 映画研究会
- ハーモニカ部
- 語学部（ESS）（1952～）
- 化学（理化）部（1951～）
- 文芸部（1951～）
- 討論（弁論）部（1952～1961）
- 音楽愛好部（1953～1967）
- 郵便研究部（1953～1958）
- エスペラント部（1953～1957）
- 鉄道部（1953～1954、1982～1983）
- 珠算部（1955～1963）
- 速記部（1955）
- 書道部（1956～1958、1974～）
- 園芸部（1959～62）
- 吹奏楽部（ブラスバンド）（1960～）
- 雑誌部（1963～）
- 数学部（1966～2000）
- クラシックギター部（1971～）
- 無線部（1974～1996）
- 茶道部（1980～）
- 漫画・アニメ部（1992～）
- 弦楽合奏団（1997～）
- コンピュータ部（2005～）

特集 三丘文化クラブの系譜 ――誕生・休部・そして復活も

三国丘高校は1948年（昭和23年）9月に発足したが、このときの文化クラブについては部分的にしか知ることができない。50年度分の「学校要覧」が残っており、それによると当時、**生物同好会・社会科・史学・音楽・放送・映画研究会・新聞・美術・天文気象・バレエダンス・カメラ・華道・ハーモニカ・演劇**の14クラブが存在した。翌年には**文芸、化学部**、その翌年には**討論部**の名前が確認できる。今も存続する生物・放送・音楽・美術・天文・演劇の6クラブは実に70年近い歴史を持つ古参クラブだ。その一方、短命に終わったものもあり、また新たに誕生したものもある。12～13ページではそのおおまかな流れを示した。

■存続させねば！

74年に発足した**無線部**は86年に休部の危機に瀕した。部員が10人を割り込みそうなのだ。生徒会長だった松岡由貴さん（高39回）はなんとか存続させようと周囲に呼びかけ、自らも入部。結果、無線部は存続となり、96年まで活動を続けることができた。

生徒会からの援助金を受けたり部室を要求できる「部」であるための規定は時代によって変化はあるが、50年当時はまず10名以上の部員が必要だった。85年からは、あらかじめ同好会として3年間の実績を積むことも要求され、部に昇格しても部員が必要人数を満たしてないと「非公認」扱いになるという厳しい現実があった。（現在は同好会活動が必要なのは「2年間」、人数面の規定はなくなっている）

■生徒の熱意受け止めて

ブラスバンドをやりたい――60年に入学した1年生数人の強い希望を音楽部顧問の野間嘉代子教諭が受け止めた。2年生、3年生にも声をかけて人数を集め、**吹奏楽部**誕生に至る。この1年生の中にいたのが後のクラリネット奏者・稲本耕一さん（高15回）。稲本さんは吹奏楽部を拠点としてクラリネットに熱中、登校するなり朝から夕方まで夢中で吹き続け、近隣からクレームが来たほどだったとか。

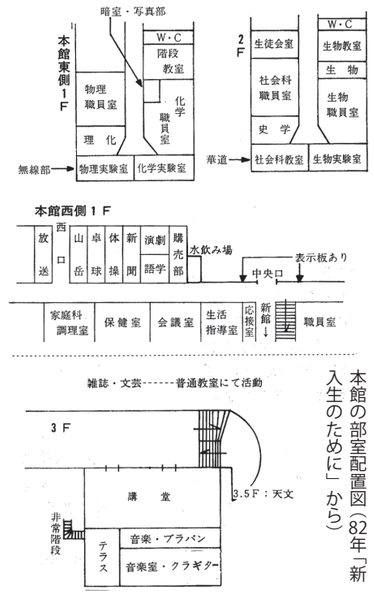
83～85年に活動した**鉄道部（鉄道研究部）**も、熱心な生徒の要望に応えて馬越敏行教諭が顧問を務めたもの。その経緯をくわしく聞こうとした矢先に馬越氏が急逝された（今年2月）のが残念である。

■活動の成果を部誌に

50年7月に創刊された「**三丘評論**」は生徒会文化部が発行した雑誌で、クラブとは異なるが、後の**雑誌部**につながるものであり、三丘評論に刺激されて、この時期各部が競うように部誌を発行した。生物部は「ルーペ（LUPE）」、史学部は「河泉」、社会科部は「風潮」、化学（理化）部は「イオン」を発行した。これら部誌の多くは今も三丘資料室に保存されている（三丘評論については16ページ「資料室だより」参照）。「三丘評論」休刊後、生徒たちの手で再建された雑誌が「学園」で、同時に雑誌部が誕生した。

■新しい動きも

伝統ある文芸部の廃部と前後して、92年には**漫画・アニメ部**が発足した。また、プログラミングも行っていた**数学部**は00年に廃部となったものの、03年に1年生3人が希望したことから、**コンピュータ部**が誕生する（05年）。「在学中にコンピュータ専門誌で優勝した者や大学進学後、研究室や大学院・企業でもそのプログラミングのスキルによって活躍している者が多い。このクラブを目指して受験したという者もいる、三国丘らしい質実剛健で少しマニアックな隠れた人気のクラブである」と、顧問の寺下晃弘教諭は語っている。



本館の部室配置図（82年「新入生のために」から）

元生徒会長・松岡由貴さんの話

85年、2年生のときに生徒会長に就任、クラブ活動にも積極的に参加した松岡由貴さん（高39回・奈良女子大学准教授）に話を聞いた。

――クラブ活動は演劇・図書・美術・理化・数学・無線の6つをかけもち、演劇では会計、図書部（※）では部長を務めました。複数のクラブをかけもちする人は珍しくなかったんですが、6つはたぶん最多でしょう（笑）。

各部の予算の配分は生徒会の仕事で、調整が大変。当時は泉文連（泉州高等学校文化連盟、泉文展を開催）に加盟しており、その窓口も生徒会でした。

部室が十分でなく演劇と語学は1つの部屋をシェアしてました。でも、部室の近さから親しくなることもあったし、各部の連携は良かったと思います。美術部の部室は「離れ」で居心地が良かったですね。そうそう、写真部の名称が87年に**光画部**になったのは当時大人気だった漫画「究極超人あ～る」（ゆうきまさみ作、私立高校の光画部を舞台にした物語）の影響なんですよ。

※図書部は学校文化部所管の特別クラブで他と性格を異にすることから、12～13ページの図では記載していない。

書道部

卒業後も書道の世界へ

高47回・世古（旧姓・宮崎）真由美さん

篆刻家として知られる真鍋昌生（井蛙）先生の指導を受けました。活動は週2回ですが、書道教室や部室に毎日のように集まっていました。文化祭では作品発表だけではなく先輩たちと一緒に会場設営をしたり、作品の表装もしたり。秋の芸術文化祭への出展も主な活動の一つで、全国大会に出た同級生もいました。高野山での夏合宿は宿坊で3日間、書道三昧。おしゃべりも楽しく、毎年参加しました。書道部出身者は書道で有名な奈良教育大や大阪教育大に進んだ人が多く、私も奈良教育大学に進みました。今も高校で書道を教えています。（談）

（**画像**は世古さんが真鍋教諭と共に作成した「一二〇周年記念誌」の落款印）

史学部

人数と脚力を生かした

高21回・池野隆さん

部員は各学年約10名で構成され、2年生が中心となって活動していた。

友達からは「ハイキングクラブ」とからかわれるほど自分達の足で野を行き、峠を越えてフィールドワークを積み重ねてきた。その結果、書物・文献の研究や知識の面では専門家に及ばないのは当然だが、人数と若い脚力で得られた地道な成果は高く評価されるものがあった。通常は部室で週3回のミーティングがあり、当時土曜日も授業があったために、校外での活動は日曜祝日や長期休暇の間に実施された。

ある時、部員が暗中模索で公立図書館に資料を探しに行くと、すでに必要な資料が準備されていたことがあった。それは、顧問の先生が密かに連絡をしてくれてあったからというエピソードもある。また、吉田正美先生の独特の手法で部員全員が拓本の作り方をマスターしていたように、顧問の先生の指導と部員の努力がうまくかみ合った部だった。

伝統のある部であったが、2000年を最後に休部となったのは非常に残念で、OBは21世紀の後輩が再び史学部の火を灯してくれることを切に望んでいる。（談）

美術部

定年退職のない仕事

高24回・籔内佐斗司さん

進学高校の落ちこぼれはつらいものだが、絵を描くことだけは得意だったので、大きな劣等感を抱くこともなく3年間を過ごすことができた。もちろん1年生から美術部に所属した。部室は、旧本館の東端に隣接した古い建物の一階にあった。ちょうど全共闘運動の最後の時期で、薄暗く油絵具の匂いが染みこんだその部屋は、新左翼シンパの先輩たちの溜まり場として特別な空気が流れていた。でもノンポリの私は、校内で誰も志望しない東京藝術大学美術学部を目指すことにした。担任の外薗良兼先生から「うちには藝大の資料はないので、君はひとりで頑張ってくれ」と早々に匙を投げられたことが、気分的にはとても楽だった。3年生は、帝塚山にあったデッサン塾に足繁く通い、学校の授業からは遠のきがちとなったが、先生も見て見ぬふりをして下さった。後年、50歳も過ぎてからのことだが、「数学の授業を受けてないので、卒業でけへんやんか！」と焦っている夢を幾度か見たことがある。高校をサボったという深層心理に潜んでいた引け目が、こんな年齢になっても顕れるものかとおかしくなった。早いもので、彫刻家を職業として40年になる。心身が健全である限り、この職業に定年退職はない。それが幸か不幸かはわからないが、還暦を過ぎたあたりから、勤め人の知人から続々とリタイアの報告が入るようになると、人生にこういう節目があってもいいのかなあと思ったりもするこのごろだ。（彫刻家、東京藝術大学大学院文化財保存学教授）

天文部

3.5Fに集った愉快な面々

高41回・山本真行さん

Halley 彗星が来た 1986 の春、旧校舎最上階 3.5F に集った愉快な面々。夏合宿の 7/29、宵の明星を皆で眺めた生石高原…突如の叫びに見た大火球…凄い降るような星、天の川。星座に四季を感じ、ラジカセの音に映画やアニメを語る濃い仲間達と唄い明かした夜の公園。暁の凪に佇む紫だちたる雲。文化祭のプラネタリウム、望遠鏡の中の土星の環、星雲、すばる‥凍える夜を明かし大晦日の朝に見た「終日の出」は何故か卒業後も年末の恒例行事だった。20 世紀の部室の扉にあった 2010 年までの 1/4 世紀カレンダー。真夏のオリオンに真冬のアルビレオ、夜明けにいつも季節を2つ先取りした天文部の Odyssey ～ 1987 と同じ星座に輝く土星に Back to the Future☆上野の博物館に眠るあの合宿の夜に見た 30 年ものの星のかけらに今年は皆で会おう…May the Force be with you!

生物部

夏休みに臨海学習

高12回・名加栄宏さん

夏休み中のイベント、若狭高浜での臨海学習は、最大の行事でした。部員のほか、全校生徒より一般募集し、総勢、40～50名。毎年、部外の先生や生徒の参加がありました。説明会で、尼木康雄先生の「宿坊は但馬屋…、**但**し、**馬屋**であります」は、いまだに耳に残っています。

それまで海といえば、浜寺とか大浜の海水浴場ぐらい。水深1mでの海底も見えないぐらいの水質でしたが、日本海の海は全く違いました。岩場では、飛び込んだ場所が私には底なしに思う深さ。水中めがね越しの水底が真っ暗で吸い込まれそうな恐怖感がありました。

岩肌にはウニが沢山生息しており、泳ぎに余裕のなかった私の足は、ウニのトゲだらけ。宿坊に戻り、トゲ抜きに必死でした。

（**写真**は若狭高浜明鏡洞で）